HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	全体討論
Author(s)	木村, 宏
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 299-309
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73746
Type	other
File Information	CATS12_24.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

全体討論

木村 宏
北海道大学観光学高等研究センター特任教授

木村宏

それではここで全体討議ということで進めてまいります、今まで 4 名の方にお話いただきましたが、歩くことに対する共通の思いがあったり、今回のテーマでもある旅育を通して地域が成長する部分や苦労談、みなさん共通していたのではないでしょうか。小林さんからは苦労談はまだ聞けてませんが、このあたり、会場も含めて意見を伺いたいと思います。佐伯さんは話してからかなり経ったので、どうですか。

佐伯雅視

一つだけ言い忘れたことがあります。最初に言った課題の中で地権者から苦情が出ているのですが、それをどういったカタチで地権者に返したらいいか。僕はやっぱり、中標津町は酪農やジャガイモなど農産物がたくさんある。そのブランドの後ろ盾になればいいかなと。たまたま、偶然ですが、ランチウェイの歌を僕が作詞して、京都のトモコさんという方が作ったみんなの一本道という曲があるんです。そのフレーズが「ラララランチウェイ〜♪」というのですが、うちの農協が作った牧場の名前が「ララファーム」なんです。それは偶然なのですが「ララ牛乳」というのを出したらおもしろいかなというのが僕のアイデア。「歩く旅」と食品、イメージ的にも相性がいい、中標津産の牛乳が売れ始めて地元の人に何か恩返し、お返しができたら最高だなというのが僕の願いです。以上です。

木村宏

ありがとうございます。小林さんも何か。

小林政能

みなさんの話しが大変素晴らしくて。コースの設定というのにみなさんご苦労されているのをしみじみよく分かりました。歩く距離とその間に見られる物とどういう風にバランスを取るのかすごく興味があって、僕は大変勉強になりました。先ほど山村先生がおっしゃったようにファンを増やす努力ですとか、僕の方だと若い女性は来るんですけど、若い男性は来ないので、若い男性はアニメの方で歩いているのかなと一つの回答が出てきました。感想みたいで恐縮ですが。

木村宏
歩かれている層はどうですか

山村高淑
九割男性です。

木村宏
この中で歩いた人はいますか。いないですね。

山村高淑
「アイヌヘリテージトレイル」の方はいろいろな層にご参加いただいています。一方、「間野山トレイル」でアニメがフックとして作用する層は、20〜40 代の男性が中心です。

木村宏
会場からもいかがですか。　はい、女性の方からどうぞ。

道尾淳子
北海道科学大学の道尾と申します。歩く層でまず導入部のレベルをどうするかというお話の中に、私も歩く研究をしていて大学の若い学生と歩いて調査をいろいろしていると、10 代と 30 代は結構歩くのですが 20 代はぐっと下がるという結果が取れました。ただ、娯楽性のお話がありましたが、ゲーム性が加わるたとえばオリエンテーリングとかスポーツ競技になるとそちらの人口は爆発的に若い世代が多いと思います。山村先生にお聞きしたいのですが、娯楽性の中のもうひとつゲーム性というところに関して、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

山村高淑
私はあまりゲームをする人間ではないのですが、リアル脱出ゲームは参加したことがあって、ものすごく歩くんですね。参加していると、結構、10 代、20 代の方が歩いていることに気付かされます。ですので、ご指摘のとおり、ゲーム性については若い世代に強く訴えかけるものがあるなと感じます。歩くことが目的、というよりも、ゲームの手段として歩くという行為が含まれる、という感じでしょうか。

余談になりますが、現在の世代的な問題というよりも、ひょっとしたらどんな時代でも 20 代は歩かなかったのかも知れません。自分も 20 代を振り返るとそんなに歩くことに楽しみを見出していなかった。

それと若い世代に関して言えば、大学で授業をしていて気づいたことがありました。ヘリテージトレイルの授業で結構歩くのですが、中国からの留学生の皆さんが結構多くダウン

する。日本人以上に中国の経済発展は著しく、交通も発達しているので、歩かなくなっているのかなという印象です。インバウンド誘致を考える際、その辺りも考慮する必要がありそうです。

小林政能

私は、話しの中にオリエンテーリングを入れようか悩んで外しました。先ほどの三角点や水準点とかを探し出したりというのをテーマにした、オリエンテーリングの派生スポーツの「ロゲイニング」のイベントでも都内でかなり集客がありました。インフラツーリズムとも被るような、測量遺産のような。そういう面では、イベント、ゲーム性は期待ができるのかなと。

木村宏

20 代の中国からの留学生も今回何人かいまして今回、中標津で歩く観光について調べる班に属している二人がいるはず。周さんからひと言どうぞ。

周寰

若者としてどうかと。確かに中国はものすごく速いスピードで発展していて、あまりにも歩く時間とか余裕がないので、それも原因かなと思います。若者として、個人的にも歩くことは嫌なわけではありません。その機会があまりないので歩く楽しみが分からないのです。接触することがないので分からない。その辺についてもう少し積極的に若者たちにプロモーションしていただければみんな参加するようになるかなと思います。

木村宏

なかなかプロモーションとして 20 代に刺さっていないというのもある。もうひとり。自ら観光の仕事をしながら今回はトレイルを歩いた、林さんお願いします。

林景ホウ

30 代で、出身は台湾ですが、台湾は車社会じゃなくてスクーター社会です。20 代に入ってからあまり歩かなくなっていると思います。私も日本に来る前にスクーターで移動して、来てから歩くようになりました。歩くことにより今まで見えなかったものが見えるようになってきてすごいいいなと思っています。スクーターのスピードが速くて周りが見えなくなっている中で歩くことにより、違う景色を見ることができるので、もうちょっと出て歩いたらいいなと思います。

木村宏

中標津を歩いてみてどうでしたか。感想は。

林景ホウ

すごくよかったです。話しながら進むと普通と同じ景色ではなくて、景色が変わったり歩く道も結構違っていて特徴も道路の横を歩いたり、全部、変化に富んだとても素敵だと思いました。

高野剛

楽しまれた方の声や発想をとらえられるかどうかについて。小林さんのお話しに強く印象を受けたのですが、私自身も通訳ガイドをしていることもあり、ガイドの仕事は気づきを与える仕事だということは今まで頭になかったので非常に衝撃を受けました。それを聞いて歩きながらガイドの想像を超える気づきを得ている人もいるのではないですか。それもまた楽しいことですが、ガイドの想像を超える気づきについて、歩いて説明をしながらしっかりコースを提供する側がキャプチャーできているだろうか。あるいは、それをキャプチャーできる優れた方法があるかどうか。

もう一つは山村先生のお話の中に、資源や魅力を自身で発見してもらうというのもあるな、と。提供者は気がつかないけれど歩いている人がこれ、すごいなと。365 日でこれ 1 回しかないかもしれないけど魅力に感じて感動されているというのを発信されるといいと思うのですが、それを提供者側、主催者側はトレイルを作ったり、プログラムを提供したりしている側がしっかりキャプチャーできているだろうか、とらえられているだろうか。そこを歩く人、話しを聞く人の気づきや感動を提供側の想像を超えている場合に、それをとらえたいですよね。それをとらえるいい方法、こういう風にやっているよというのがあれば知りたいですし、結構それは研究されていてこういう優れた方法があって、トレイルを歩く人、参加した人の感動や気づきを非常に優れた方法で取られる研究があるなら教えて欲しい。

小林政能

今のお話、自分がガイドをやっているときに、自分自身はそのコースのことを一番詳しいと思っていないのです。なので、実際に歩いている方が、いろんなことを見つけられるのは僕も知りたいと思っています。境界協会のコンセプトは「発見の旅」。自分の二つの目だけでは絶対に見落とすものがあります。先ほどの境界のマークなんて、人の目の数が多くあったほうが見つかると思っています。このようなことは多々あります。先ほどのお話の中でも 3 つの振興局の境目も今日、一緒に行ったメンバーから教わりました。自分の場合のガイドは、コーチであり、一緒に歩く人との共感の場ですので、コミュニケーションが最重要ということになってくると思います。

山村先生のお話で、最後にアイヌの方とお茶を飲んだのが一番楽しかったというアンケートの結果について、僕はとても心に残っています。境界協会では、最後はどこで飲もうか、飲み会をどこでやろうかということでコースを決めることにしています。講座をやっていてもそうです。冗談半分ですが、デートで映画を見るのは、映画を見に行くことが目的では

ないんです。同じ物を見てその後に話しをするのが目的なんです。なので、僕は同じ物を見た後に話す時間を重要視したいと思います。

山村高淑

私も小林さんとまったく同感です。私からは、自分の経験に基づいて２つ、申し上げたいと思います。

ひとつは、小林さんがおっしゃったのと同様、我々がいつも心がけているのはアフターをどうするか、という点です。ツアーが終わった後にお茶を飲んだり食事をしたりする時間を設けてそこで雑談をするようにしています。雑談がすごく大事だと思っています。コースの設定で他と違うところがあるとするなら、「アイヌヘリテージトレイル」も「間野山トレイル」もエコミュージアム的なコンセプトを持っていて、コア施設をスタート地点、ガイダンスの場所として設定していて、そこに戻ってくるようなルートを組みます。北大だと学食だとか博物館。南砺市だとまさにクリエイタープラザのカフェ。戻ってきた後に休みながら、ツアー終わりましたよ、だけどみんなで雑談しましょう、という中でフィードバックをいただくようにしています。

もうひとつ、これはおそらくまちづくりのワークショップの手法とかエコツーリズムの宝探しの手法とかに重なると思うのですが、マップ等に参加者が気づいたことをどんどん記入していく手法があると思います。歩きながらどんどん書いてもらったり、今ならグーグルマップなんかで共有できるものを作ってどんどん入力してもらったりすることもできます。今、我々がやろうと思っていることは、南砺市のクリエイタープラザのカフェにひとつ白地図みたいなのを置いておいて、歩いた人に「今日、ここでこんな鳥を見たよ」とか、「こんな発見があったよ」とか、何かあればどんどん書き込んでいってもらうようにしたいと考えています。

木村宏

ついでに私もガイドの養成とか自分もガイドやったことがありますが、ガイドの資質を上げるという意味では、ゲストが何を感じたかとか目からウロコみたいなことをどうやって引き出すかが非常に大事なところだと思います。ガイドの質を上げるにはそれをどうやって聞き出すか。コミュニケーションを取るのが私も一番いいと思っています。

ただ、職業ガイドになればその後お茶飲みましょうということにはならないので、基本的には最後、終わったところのアフターミーティング、「今日、どうでしたか」「何か分からないことありませんでしたか」などの質問にアンケートで答えていただく。アンケートにはなかなか悪いことは書けませんので、アンケートに書いていただけないようなら、のちほどインターネットでどうぞというような案内を出す。

一番大きいのはいろんな人たちがいろんなことを、例えば桜が池のトレイルを歩いた後に今、これで上げてくる。（スマートフォン）ここからの情報をいかに拾えるか。ここは一

番確かな情報が上がってくる。それを拾う術をそれぞれ持つのが大事です。それは組織的にトレイルを運用するということにもかかってきます。個人でやれることは限られているので、いかに組織的に情報を得て、ガイドにフィードバックするか。そこはガイド養成でも非常に気になったところでして、通り一遍の良かった悪かったみたいなアンケートではダメだと感じています。

樋口さん、客観的な事実はお話いただいたのですが、具体的に桃米村の方とか南三陸の方が悩んでいたりすることとか、肌で感じた課題をもう少し生々しく話していただきたいのですが。

樋口葵

桃米村は「紙教堂」のある「新故郷見学園区」内がメインとなってガイドがいる状態で、認定ガイドは 30 人ほどいます。その一人から話を聞くと、それだけでは食べていけないといっていました。お金をもらうためにやっているというよりは、自分の生きがいのためにやっている人が多くて、それだけで生計を立てようとは思っていないようです。

南三陸のほう、語り部の方だと、自分たちが震災を経験してきているので未だにその日の気分によって違うみたいです。悲しい気分の日は、涙を流しながらしゃべっちゃうという時もあるそうです。ガイドの気持ち次第ではあるみたいですが、どうしようと思う日もあって、心の奥ではそのような思いを抱えているそうです。観光協会のまちあるき部がやっているコースもですが、椿の避難路は、特に日常的に歩くということにはなっていなくて、自分たちで道を作りながら、ここを日頃から歩きましょうねという程度です。誰が日常的に草を刈るなどの整備をして、いつでも逃げられるようにするのかが課題ではあります。

木村宏

会場から何かありませんか。

加藤寛

樋口さんに教えてもらいたいのですが、私が例えば南三陸町に行くとすると、訪ねるビジターの立場になったら自分の楽しみのためには歩ける道があるのは嬉しいことなんですけど、一方、訪ねるところが被災を受けているところによそ者が勝手に入り込んでいいのかと、なんとなく行きにくい感じを持つのですが、地元の人たちは平和なところと同じような感じで受け入れてくれるようなものでしょうか。

樋口葵

南三陸だと震災後すぐにボランティアの人が入ってきていて、震災後は地域外の人とのふれあいが多くなっています。そのため震災後は、昔より受け入れが広くなっている印象です。南三陸町自体、2，3 年前から地元の人が、自分たちの町を知って、観光客を受け入れ

ていきましょうという対応をしていた部分がありますが、南三陸全体に広がっているというよりは、その中の一部の人だけでした。ただ、震災後はそれ以上に外の力の大きさに地元の人が気づいたという点があり、以前よりも受け入れが大きく、スムーズになっているのではないかと思います。誰が行ってもすぐ受け入れてくれるような雰囲気があります。

木村宏

境界協会のみなさんも 20〜80 代ということですので何かありませんか。

竹村香都

出身は大阪で今は関東にいます。すごくみなさんのお話がおもしろくて、今ここのグループ 6 人で山村先生のお話を聞いていたときに我々はやっぱり一般の感覚です。一般の間口を広げようと思っていろいろされていると思うんですけど、それの参考にこの 6 人はまったくならないなと感じます。お話を聞いただけでもう地図を広げて地形が出てくるアプリを広げて、「何ここ、地形みるだけでもうおもしろそうじゃない」と、ここにもう全員が行きたくなっているというような状態なんですね。それであまり参考になる意見が言えなくて申し訳ないです。

山村高淑

ぜひ、お越しいただいてフィードバックを頂ければ嬉しいです。

竹村香都

これは個人的なお願いですけど、配ったときに不評だった詳しい方のアイヌのガイドがまだあるならいただきたい。

山村高淑

1 部手元にございますので境界協会さんに後程ご謹呈申し上げます。

竹村香都

いや、個人的にすごく興味があります。

木村宏

同じ歩くでも視点が全然違うというのがこれで分かったと思います。小林さんに伺いたいのですが、境界を追っていくことで、どんなことが発見されたのか、小林さんも予期されなかったことで新しい展開になったとかありませんでしたか。

小林政能

歩いているとその辺りに住んでいる方はすごく境界線を意識しています。なにやってるのあんたたちっていう感じで話をしてくださる方がいる。そうすると、その地元の方々が、なんでこうなったんだとか詳しくお話いただくことがあります。歩いてみないと、そういうことには出会えません。ネットや書籍を調べているだけでは出会えない発見がフィールドにはあるかなと。東京都の公園の管理センターのパネルに昔の土地の所有者のラインがあって、それで境界の理由が分かったこともあります。実際に見て歩かないと分からないということが多々あって、必ずしも全部が全部行ける場所ではないのですが、やはり見て、歩いて分かること、発見することというのがたくさんあるなと正直思います。

木村宏

明日行かれる中標津と標津の境界線、たぶん地域の人にとっては通り過ぎるかまったく行ったことのない場所だと思います。その中でどんな発見ができるのか、私よりも地域の人が何を感じるのかなと非常に興味がありますので、明日、数に限りがありますが余裕がありますので、中標津の方がいらっしゃいましたら隣近所にお声をかけてください。

その中標津で境界もいろいろお調べになっているでしょうし、地域の方の声とか歩いている人の声も、いろいろ佐伯さんの耳に入っていると思いますがその辺り教えてください。

佐伯雅視

僕たちのメンバーにこの町の経済部長もいます。メンバー全員、「今日、歩きに行くか」と言ったら、時間があれば必ず「行きます」と言うんです。とにかく歩くのが大好き。目的が何が見えるから、風景がいいからとかではなく、歩くのが大好き。それでテレビ局とか新聞社が「何かいい景色がありますか」とか「動物が見えますか」って聞かれますが、そのときは答えに窮する。

僕たちは歩くのが好きなので見えるものはおまけですからと言われるので、私は人間ってただ歩いてみたいと思っている人はたくさんいると思います。ただ歩きたいだけ、その中におもしろいことがあればそれはおまけ、そういう気持ちでやっています。

木村宏

単に歩くと言ってもみなさんいろんな想いがあって歩いているんだなということが分かりますよね。いろんな想いの中に、今日は被り物をして来ている人がいて、何の人なのかなって思っている人がいると思うのでちょっとお聞きしたい。

大橋勝憲

クマゴロンという被り物で、シレトコドーナツというドーナツの中に熊が入っていたり、パンダが入っているインスタで調べていただくと一番早いのですが、そのものを東京とか

で売っている、クマゴロンの大橋と申します。佐伯さんとは三年くらい前に僕も全国、東京でシレトコドーナツを売りに行っていて、ちょっといい気になって東京の人になろうかななんて思ったときがあって、佐伯さんから話しがあって、佐伯さんも実はレストラン牧舎と言うところで何十年か前に自分のところの牛乳やチーズケーキを全国に売り歩いて、自分は人を使うのが苦手だからということですっと辞めて、歩く道を作ると言うことで 13 年前から始めたらしくて。そんな佐伯さんが「大橋さん、東京で物を売るのはいいんだけど、片脚くらいは地元に足をつけて地元と都会とを行き来しながら自分の商売が長く続くんじゃないか、自分の感性をもっと磨けるんじゃないか」という話しがあって、それで戻ったら道を作っていた。

たまたま開陽台の麓にあるカフェ開陽台をうちで運営していまして、久しぶりに戻ったらリュックを背負ったハイカーというんですか、歩く方が訪れるとメンバーが言っていて、なんだろうと思ったら佐伯さんのキラウェイだったという。

そんななかで 3 年前から関わるようになったのですが、今、山村先生とかのお話を聞いていて、僕が一番佐伯さんに今でもどう思っているのかなというのが一つあって、こういう場でどうなのかと思いますが、僕は被り物してるのですが、佐伯さんとかはすごいまじめな方なんですよ。めちゃまじめで。今の答えにあるように、歩くことが好きだから歩いている、という。木村先生も佐伯農場に行ってますけれども、どう考えても佐伯農場のイメージに被り物は合わないのではないかと思いながら 3 年間、佐伯さんは許してくれているのか分からないですけど、僕を受け入れてくれている。そんななかで山村先生のお話を聞いて、僕は実は会社をやっていて、ファン＝ファンという想いがあり、楽しいことをするとファンが喜ぶ、ファンを作るためには自分が楽しく、仕事と生き方を一致されるというポリシーがありまして、どんなときでもプライベートは逆に被り物を脱ぐことはありますけど。僕は久々に文字を書きたいなと思ったのですが 5 ページくらい書いてめちゃ歩くことに関してこれからいろいろしたいなと思います。

先ほど言っていた楽しさをキャプチャーしているか、捉えているかということで、僕もシレトコドーナツを知らないところで売っているんですね。東京の上野とか品川駅とか。そして実際に買ってはもらっている。年間 5 億くらい、150 万個くらいのドーナツを販売しているのですが、どうして買うのかな、買った後どうやってお客さんは食べてるのかなって。今の時代ＳＮＳとかで。実は、キラウェイもハッシュタグでキラウェイとか北根室ランチウェイと打つと北根室ランチウェイを歩いた人がどんな写真をアップしているのか、僕はずっと見ているんですよね。どんな部分に感動しているのかとか、あれ、こんなところの写真撮ってアップしてるとか、例えば牧舎さんで食べてる食事風景とか。そういうところを捉えている。

佐伯さんは大変忙しいのでガイドとか一緒に行ったらそういう話は聞けるけれど、やっぱり木村先生が言うようにコミュニケーション、そばにいないとなかなか伝わらない。昨日、実は佐伯さん、マンサードホールのジンギスカンの写真をアップしてくれた。なんでアップ

したかというと、僕が今朝 5 時くらいにフェイスブックに写真をアップしたんですよ。この写真、今日のフォーラムで使ってくれたら嬉しいなってアップしたのを佐伯さん、見たと思うんですよね。僕、渡してないので、写真を。もしかして、この写真をアップすることが大切なことなのかなと。実は昨日北大生のみなさん、木村先生、マンサードホールに観光協会の佐々木理事長という入りたての若いバリバリの、あとは地域おこし協力隊の 4 名が初めてマンサードホールに集まって北大のみなさまとコミュニケーションを取って、ランチウェイも何回か歩いたのでみんなと話したり。あと木村先生のすごいなと思ったところは、一人ひとりに自己紹介をさせて挨拶をさせた。それがコミュニケーションなんじゃないかなと思います。僕は 3 年来て、僕が何をキャプチャーしたかというと、マンサードホールで佐伯さんに「来いよ」と言われて行ったら、いろんなところから来ていて、関西から東京から。僕は自分のことを紹介するのが苦手なので佐伯さんが必ず「シレトコドーナツって知ってる？その大将だよ」って。「あ、そのドーナツ東京駅で見たことあるよ」とか「知らないです」と聞くのが僕は楽しみで、そこで自分のブランドがどのくらいまで価値があるのかを実は自分なりに見て、札幌から来た人は知らない、そういえば札幌で売ってない、東京、関東、関西は催事に行ったからあれだよねという感じで受けたりします。そんなことでこれからもいろいろあるとは思うのですが、僕なりに佐伯さんの舟に一度乗った身なのでできる限りサポートしながらいければいいなと思いました。

木村宏

マンサードホールというのは昔の牧舎、牛舎を改造したコミュニティホールです。ということで、予定をしていた時間を過ぎてしまいましてこの後、交流会に参加される方もいらっしゃいますので熱い話はこの次の場につなげていければと思います。下休場先生にまとめをお願いします。

下休場千秋

まとめにはならないと思います。感想というか、最初に歩く観光とか歩く旅ということをお話ししたのですが、こういう視点というのはこれから観光を考える上で非常に重要だなということを改めて感じました。観光資源があるとか人が集まるとかではなく、そこに人が暮らしている地域であれば歩けば何かが見つかる、今は何か分からなくても必ず何かがあると言うことが分かりまして、今日は境界協会のお話やコンテンツツーリズムのお話、さらには、被災地域や地元のランチウェイにおける歩く観光のお話しなど、どの地域でも隠れた宝物が埋まっているということを改めて思いました。それらの価値を地域の人もそこを訪れる人もやはり知るには歩くしかないというのを改めて感じまして、そういう意味で今日の機会は非常に私自身にとっても勉強になりましたし、観光の一つの方向性として歩く観光、歩く旅育ということを観光を考える上では忘れないで、これからも様々なところへ歩く観光に出かけたいなと思っております。この中標津から北根室ランチウェイの灯を消さず

に将来にわたって歩く観光が広がっていくことを期待したいと思います。ありがとうございました。

木村宏

最後は中標津にエールを送るカタチで総まとめをしていただきました。今日、みなさんのお話の中で交流とか体験、共有、まさに地域の連携、仕組み作りといういくつかのキーワードが出てきました。それはすべて道がつながることであり、それを次の世代へつないでいくということをみなさん課題としてお持ちになっていたと思います。

そういう意味では、まだまだエンドレスに話をしていかないといけないテーマだなとさらに感じたわけで、三月に北大でこのテーマで話したときにまだ消化不良だなということで今回になっている。まだ消化不良が増したような感じがありますので、また引き続き歩く観光について議論していきたいと思います。さしあたって、今回、中標津のみなさまにご尽力いただき、理解いただき、このシンポジウムができましたことを感謝申し上げてこの場を閉めたいと思います。また登壇いただいた皆様方にはお忙しいなか、ありがとうございました。以上を持ちまして北海道大学コロキアム修了させていただきます。ありがとうございました。